

8月の発生予報および防除上の注意事項

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生動向は次のように予想されます。

沖縄群島

1 水稲

2期作に向けた種もみ消毒及び育苗管理について

- a 種もみは塩水選したものを用い、うす蒔きにし、充実した苗の育成に努める。
- b いもち病、ごま葉枯病、ばか苗病等の種子伝染性病害は播種前の種もみ消毒で予防する。さらに、ウンカ類、イネミスゾウムシ等を防除する箱施用薬剤を利用する。

移植期におけるスクミリンゴガイの防除について

- a 基肥の窒素分として石灰窒素を施用すると殺貝に有効である。散布は、砕土、湛水(水深2～3cm)後3～4日目に行い、散布後2～3日間は落水や掛け流しをしないようにする。田植えは10日以上放置後、代かきして行う。
- b イネの被害は移植直後の幼苗ほど被害を受けやすいので、常発地では中・成苗移植を行う。
- c 本種は水中でしか摂食しないため、移植後は水深をできるだけ浅水(水深1cm以下)で管理する。

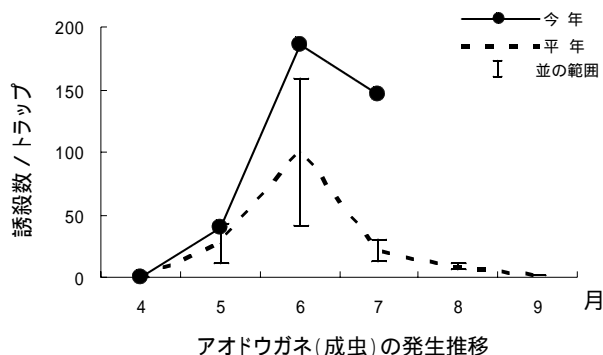
2 さとうきび

(1)アオドウガネ

発生程度 : やや多

予報の根拠

- a 7月の予察灯による誘殺成虫数は147頭(前年33.9頭、平年21.2頭)と平年より多かった。
- b 7月の掘取り調査(16圃場)では、アオドウガネの幼虫は確認されなかった。



防除上注意すべき事項

- a 6～9月は成虫の発生時期にあたるので、誘殺灯の管理ならびに誘殺虫の回収処分を徹底する。
- b 7～8月は幼虫の防除適期(1～2齢期)にあたるので、うね間を中耕することによって耕種的防除を行う。
- c 被害の予想される地域では薬剤による防除を徹底する。

3 マンゴー

収穫後の病害虫防除対策について

- a 開花期から収穫期までは薬剤による病害虫防除が出来ないことから、新葉には炭疽病、軸腐病、チャノキロアザミウマ、マンゴーキジラミ、ドクガ類、マンゴーハフクレタマバエが、成葉にはマンゴーツメハダニ、カイガラムシ類等の病害虫が多く発生する。
- b 収穫後、結果枝を切返して発生する夏秋梢と花痕枝が次年度の結果母枝となることから、本母枝の充実度は来年の収量・品質に大きく影響する。この時期の病害虫防除は、栽培管理とともに重要である。
- c アザミウマ類や、ハダニ類、カイガラムシ類などの微小害虫は一般的に風雨に弱いことから、収穫を終えた施設は、樹勢回復も兼ねて、早めに被覆ビニールを取り除く。
- d 剪定を行った後の残渣は、病害虫の発生源となるため、施設外に持ち出し処分する。
- e 病害虫発生技術情報 1号（平成18年 8月 1日付け）参照。

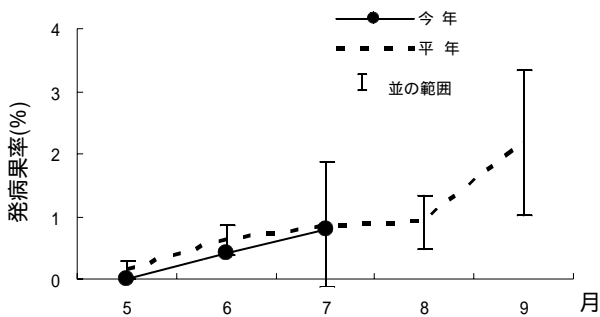
4 温州みかん

(1) かいよう病

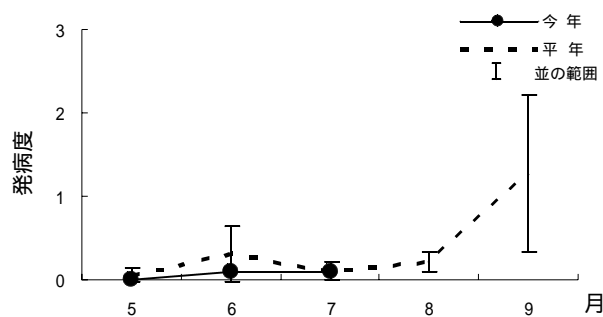
発生程度 : 並

予報の根拠

- a 7月下旬の調査の結果、果実における発病果率は0.8%（前年0%、平年0.9%）と平年並で、発病度は0.1（前年0、平年0.1）と平年並であった。
- b 気象予報によると、向こう1ヶ月の降水量は平年並の見込み。



温州みかん果実におけるかいよう病の発生推移



温州みかん果実におけるかいよう病の発生推移

防除上注意すべき事項

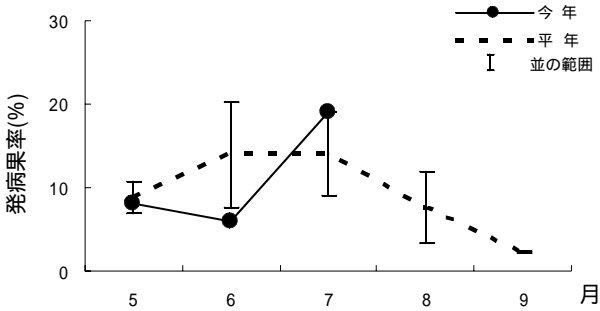
- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b 台風の前後に薬剤防除を行う。

(2) そうか病

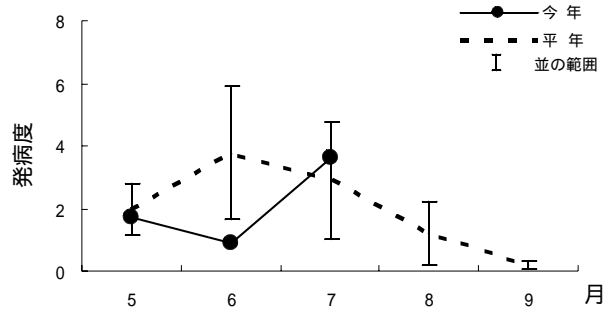
発生程度 : やや多

予報の根拠

- a 7月下旬の調査の結果、果実における発病果率は19% (前年21%、平年14%)と平年並みであり、発病度も3.6(前年3.4、平年2.9)と平年並であった。
- b 一部圃場で多発生がみられた。
- c 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並の見込み。



温州みかん果実におけるそうか病の発生推移



温州みかん果実におけるそうか病の発生推移

防除上注意すべき事項

- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b 台風の前後に薬剤防除を行う。

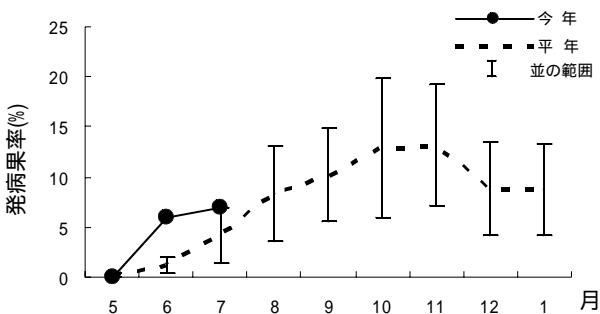
5 タンカン

(1) かいよう病

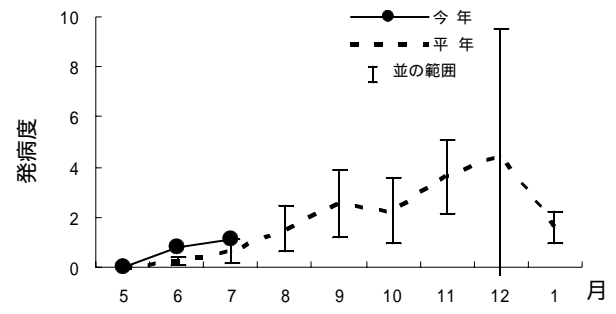
発生程度 : 並

予報の根拠

- a 7月下旬の調査の結果、果実における発病果率は7% (前年0.8%、平年4.2%)と平年よりやや高く、発病度は1.1(前年0.1、平年0.6)と平年並みであった。
- b 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並の見込み。



タンカン果実におけるかいよう病の発生推移



タンカン果実におけるかいよう病の発生推移

防除上注意すべき事項

- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b 台風の前後に薬剤防除を行う。

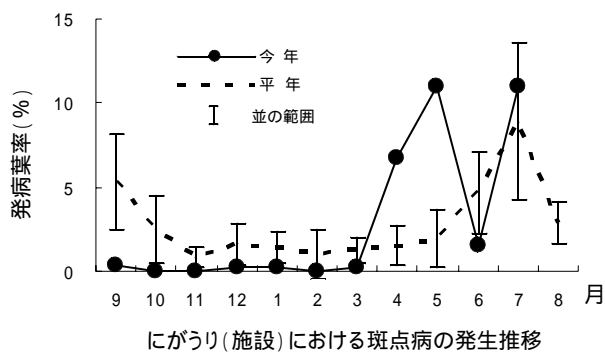
6 iga(施設)

(1) 斑点病

発生程度 : 並

予報の根拠

- 7月下旬の調査の結果、発病葉率11.0% (前年9.75%、平年10.2%)と平年並みであった。
- 本病は例年、夏場に多く発生する傾向にある。



防除上注意すべき事項

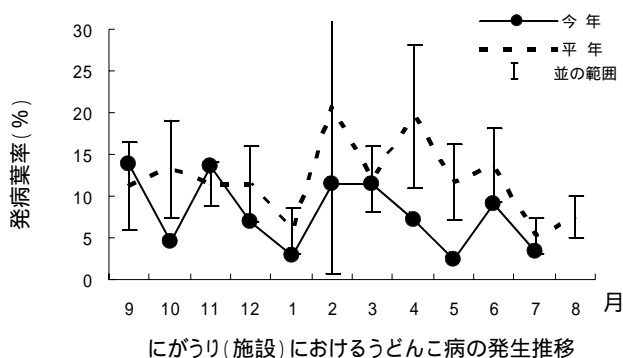
- 老葉や病葉は発生源になるので除去し、圃場外に持ち出し処分する。
- 圃場の排水を良くし、密植にならないように注意する。

(2) うどんこ病

発生程度 : 並

予報の根拠

7月下旬の調査の結果、発病葉率は3.25% (前年0%、平年5.00%)と平年並であった。



防除上注意すべき事項

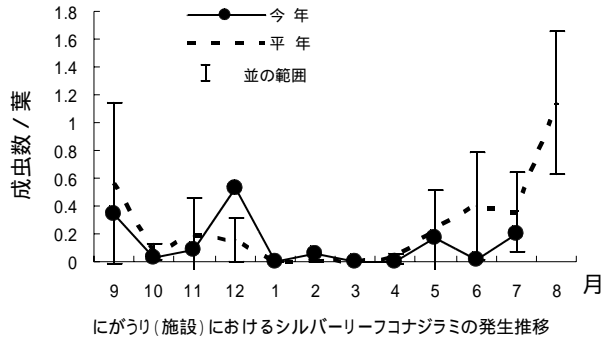
- 密植を避け透光通風を良くする。
- 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので早期発見、早期防除に努める。

(3) シルバーリーフコナジラミ

発生程度 : 並

予報の根拠

- a 7月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.20頭(前年0.36頭、平年0.35頭)と平年並であった。
- b 平年、7月から8月に増加する傾向がある。



防除上注意すべき事項

- a 発生源となる施設周辺の雑草を除去する。
- b コナジラミの飛来侵入を防ぐため、施設の入口、天窗、側窓には防虫ネット等を張る。また、苗による持ち込みを防ぐ。
- c 摘葉・摘芯後の残渣は成虫の発生源となるので、ビニール袋などに入れ施設外に持ち出し処分する。
- d 圃場観察や黄色粘着トラップでモニタリングし、早期防除に努める。

ミナキイロアザミウマの防除について

一部圃場で幼虫密度の高い圃場があり今後多発するおそれがあるので、以下の点に留意し防除対策をとる。

- a 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- b 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

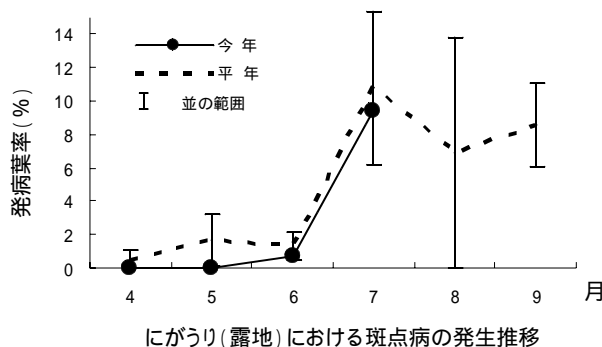
7 にがうり(露地・平張り)

(1) 斑点病

発生程度 : 並

予報の根拠

- a 7月下旬の調査の結果、発病葉率9.4%(前年0%、平年9.81%)と平年並みであった。
- b 本病は例年、夏場に多く発生する傾向にある。



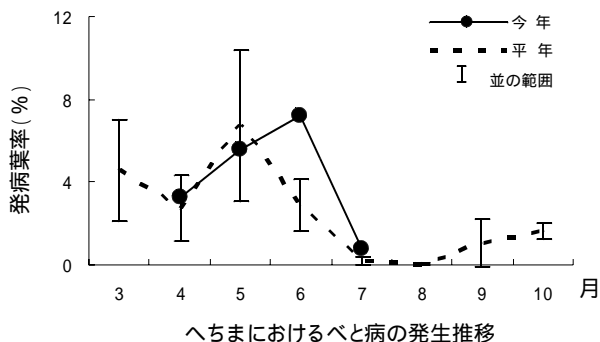
防除上注意すべき事項

- a 老葉や病葉は発生源になるので除去し、圃場外に持ち出し処分する。
- b 圃場の排水を良くし、密植にならないように注意する。

8 へちま
(1)べと病

発生程度 : やや多
予報の根拠

- a 7月下旬の調査の結果、発病葉率は0.8% (前年0%、平年0.2%)と平年より高かった。
- b 気象予報によると向こう1ヵ月の降水量は平年並の見込み。



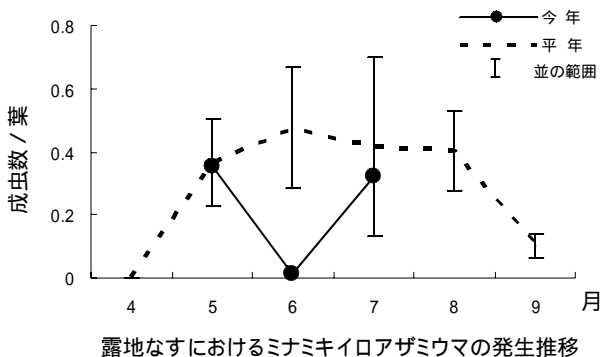
防除上注意すべき事項

- a 雨滴等による病原菌の跳ね上りを防止するため敷草かビニールマルチを行う。
- b 排水、通風をよくする。
- c ハモグリバエ類幼虫の食害痕等から病原菌が侵入しやすいので同虫の防除を行う。

9 なす(露地)

(1)ミナキイロアザミウマ
発生程度 : 並
予報の根拠

- a 7月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.32頭 (前年0.35頭、平年0.42頭)と平年並であった。
- b 一部圃場で多発生が見られ、葉裏にシルバリング(食害により銀色に光沢を帯びること)が生じていた。
- c 気象予報によると、向こう1ヶ月の気温は平年より高くなる見込みで、本種の発生が助長されやすい。



防除上注意すべき事項

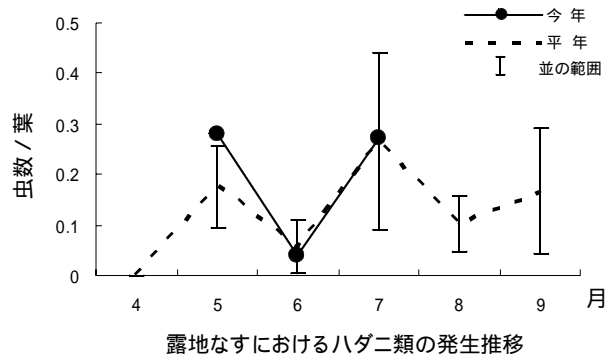
- a 発生源となる周辺雑草の除去に努める。
- b 多発すると、果実はケロイド状やサメ肌状となり品質が低下し、防除も困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- c 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

(2)ハダニ類

発生程度 : やや多

予報の根拠

- a 7月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.27頭(前年0.21頭、平年0.27頭)と平年並であった。
- b ハダニ類は高温乾燥時に発生が助長される。気象予報によると、向こう1ヶ月の気温は平年より高く、降水量は平年並の見込み。



防除上注意すべき事項

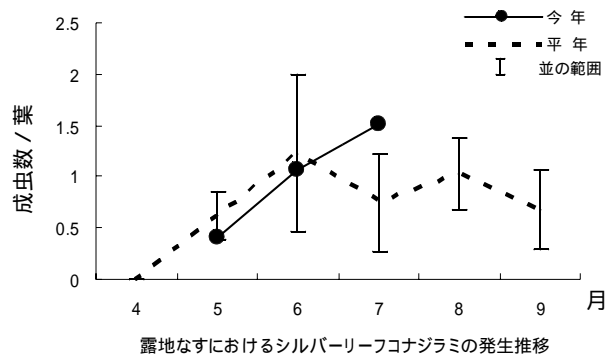
- a 発生源となる周辺雑草の除去に努める。
- b 加害された葉は白くかすり状にぬげ、著しく加害された株は枯死することもある。
- c 葉裏に寄生するため、薬剤は葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
- d 薬剤の効果はハダニの発育段階ごとに異なるため、卵から成虫が混在するようになると防除が困難になる。早期発見・早期防除を心がける。
- e 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

(3)シルバーリーフコナジラミ

発生程度 : やや多

予報の根拠

- a 7月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は1.52頭(前年2.19頭、平年0.75頭)と平年よりやや多かった。
- b 一部圃場で葉当たり成虫数が5.4頭と多く、すす病の発生も認められた。



防除上注意すべき事項

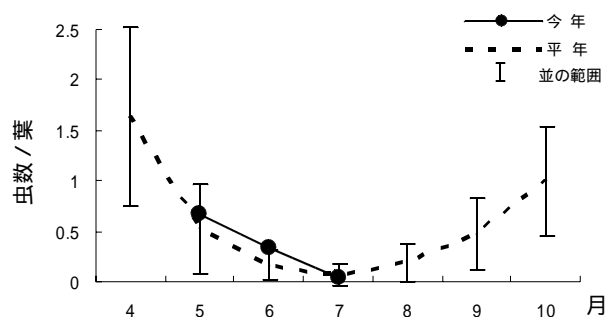
- a 発生源となる周辺雑草の除去に努める。
- b 多発すると、排泄された甘露によりすす病が発生したり、吸汁により果実の肥大が止まることもあるので、発生初期の防除を徹底する。
- c 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

10 オクラ

(1) アブラムシ類

発生程度 : 並
予報の根拠

- 7月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.03頭(前年0.69頭、平年0.07頭)と平年並であった。
- 一部圃場で幼果への寄生やすず病の発生がみられた。



オクラにおけるアブラムシ類の発生推移

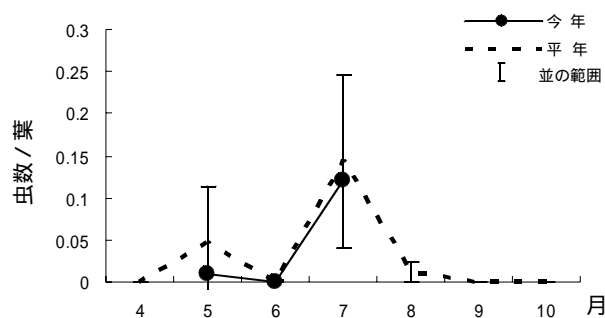
防除上注意すべき事項

- 多発すると防除が困難になるので、葉裏や生長点を観察し、早期発見・早期防除に努める。
- 多発すると、蕾や幼果へも寄生し、排泄された甘露によりすす病が発生する。
- 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

(2) ハダニ類

発生程度 : やや多
予報の根拠

- 7月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.12頭(前年0.42頭、平年0.14頭)と平年並であった。
- ハダニ類は高温乾燥時に発生が助長される。気象予報によると、向こう1ヶ月の気温は平年より高く、降水量は平年並の見込み。



オクラにおけるハダニ類の発生推移

防除上注意すべき事項

- 発生源となる周辺雑草の除去に努める。
- 加害された葉は白くかすり状にぬげ、著しく加害された株は枯死することもある。
- 葉裏に寄生するため、薬剤は葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
- 薬剤の効果はハダニの発育段階ごとに異なるため、卵から成虫が混在するようになると防除が困難になる。早期発見・早期防除を心がける。
- 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。